

2012 年 1 月 19 日

メンタルフレンドの役割形成過程に関する考察
Study on the process of role formation of mental friend

1000-100703 大川裕司
指導教員 白崎けい子 教授

I 問題と目的

不登校者数は平成 22 年度の学校基本調査によると、小学校では 21,675 人（308 人に 1 人）、中学校では 93,296 人（37 人に 1 人）となっており、全児童生徒に対する不登校児童生徒の割合は、1.14%である。この状態は数年前から存在し、今では不登校という言葉が広く知れ渡っている。

この問題に対し、平成 3 年より、厚生省の「ひきこもり・不登校児童対策モデル事業」の一環で、「ふれあい心の友訪問援助事業」が展開されてきた。これがメンタルフレンド事業である。また、民間の団体においても盛んに活動している実態もある。

さて、メンタルフレンドの役割について金井（1997）は、①子供を支える役割、②子供の興味や関心を広げていく役割、③子供の生き方のモデルとなる役割、④子供と社会との接点としての役割、の 4 つを挙げている。同様に、倉島（1999）は上記に加え、⑤学習進路指導の役割、⑥家族への対応の役割、を挙げている。効果という点において、メンタルフレンド活動の効果は多く支持されており、メンタルフレンドが不登校の子どもたちの社会復帰への手助けとなったという報告（伊藤，1999）や、追跡調査の結果から義務教育終了後には高校進学や就職というように自らの生き方を見出していった子どもたちが少なくないことが示されている（武井ら，1999）。

一方で、このように実際に効果があり役割も提示されているメンタルフレンド事業であるが、酒井ら（1999）が指摘しているように、枠組みの曖昧さや児童相談所職員からのサポートが不十分な場合があることも報告されている。また、メンタルフレンドの約 8 割が役割に対する不安を抱えているという結果も出ている。

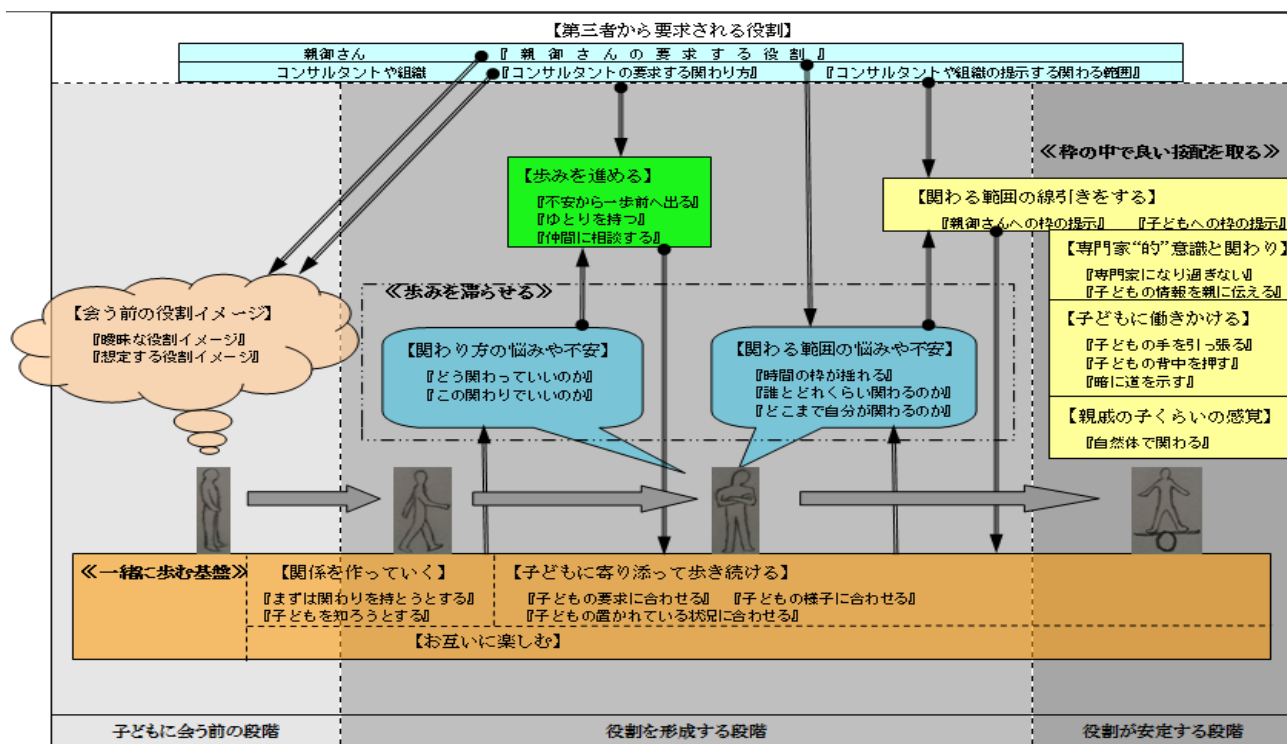
そこで本研究は、メンタルフレンドの語りをもとに役割がどのように形成されるのかを体系的に明らかにすることを目的とする。そして、役割が形成される過程、及び不安が生じる過程について検討する。

II 方法

筆者の所属する、平成 12 年から家族療法を基盤に不登校・引きこもり支援を行っている NPO 法人メンタル・コミュニケーション・リサーチにて、メンタルフレンド活動を行ったことのある 11 人（M：28.18 歳，SD=4.79）に対して聞き取り調査を行った。調査は個別に半構造化面接を 1 時間ほど実施した。その際の主な質問事項は、「どのように子どもと関わっていたか、どうしてそのように関わっていたか、活動中に不安に感じたことや戸惑ったことについて、その対処について」である。

分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに準拠した。分析テーマは「メンタルフレンドが子どもや親との関わり方や関わるの範囲を形成していくプロセスの研究」とし、分析焦点者は「月に 1 回の定例会と親の面接を別に設けた組織に所属しながら、メンタルフレンド活動の経験を有する、活動当時大学生・大学院生」とした。文字化した録音データを、分析テーマと分析焦点者という視点から見ていき、その具体例を集め、ある程度幅のある概念を作っていた。そして、概念がいくつか生成されそれらの関係性が見え始めた頃からカテゴリーも生成していった。それら概念やカテゴリーをつくりながらも分析テーマにおける相互作用のプロセスを意識しながら分析を進めていき、最終的に全体のプロセス性を明らかにした結果図（図 1）を作成した。

III 結果と考察



→は影響の方向、⇒は役割のできる流れ

図 1 結果図

《》はコアカテゴリー、【】はカテゴリー、『』は概念

分析の結果、28 の概念と、12 のカテゴリーと、3 のコアカテゴリーが抽出され、役割形成過程及び不安や悩みが生じる過程が明らかとなった。子どもに会う前の段階では、【会う前の役割イメージ】を持つことが分かった。各段階において、《一緒に歩む基盤》が見られ、それを基にしながらも、《歩みを滞らせる》ことが生じ、それに対して【歩を進める】ことや【関わる範囲の線引きをする】などして、メンタルフレンドは活動中に生じる不安や悩みに対処していた。【第三者から要求される役割】もメンタルフレンドが役割を形成するに当たり影響を及ぼしており、子どもに会う前の段階では、【会う前の役割イメージ】の形成に影響を与え、役割を形成する段階では【歩を進める】ことに影響を与えたり、【関わる範囲の悩みや不安】に影響を与え、その結果【関わる範囲の線引きをする】ことを促していることが分かった。以上のような、相互作用や試行錯誤を繰り返しながら、役割が安定する段階に入り、メンタルフレンドは子どもの状態や様子に合わせて《枠の中で良い按配を取る》ことが分かった。

先行研究と比較すると、松尾（2007）の研究においても、《一緒に歩む基盤》と類似した概念が重要とされていたり、メンタルフレンドの役割を研究した伊藤（2002）の結果と《枠の中で良い按配を取る》の下位カテゴリーが類似していた。これらの点からして、分析の結果得られた役割に関しては先行研究と近い結果が得られたと考えられる。しかし、役割に関わり方と関わる範囲から捉え、それらの形成過程を明らかにした研究はなく、新たな知見と言える。

役割理論から考察を加えると、メンタルフレンドが悩みや不安を抱える過程には、役割葛藤や役割曖昧性が存在する可能性が考えられる。それらの視点からメンタルフレンドの役割形成過程を捉えることにより、メンタルフレンドの不安や悩みへの対処の仕方や、予防的なサポートへの提言を可能にした。また、サポート体制の重要性や仲間同士の支えあいについても、メンタルフレンドの不安や悩みへの対処策として有効性が示唆された。

今後の課題として、今回の研究では、家族療法を基盤とした月一回の定例会や親への面接があるメンタルフレンドを調査対象としたので、今後は心理系出身者でない者や、定例会や親への面接がない者にまで調査対象を広げて研究することがより幅広く実践へと応用するために必要かと考えられる。また、今回得られた理論を現場に取り入れて、そこで応用した結果を通して、理論の検証を行っていききたい。そして、実態を明らかにするための数量的な研究も求められると考える。